

従来型スキンケアの発想

① 不足を外から補う

↓

肌に足りないものを、化粧品などによって外から与える。

↓

② 一時的に肌の状態が整う

↓

ここでいう「整う」は、必ずしも「肌そのものが改善した」という意味ではなく、外から補ったことで、その時点では整って見える・感じる状態。

↓

③ 時間とともに、補ったものが失われ、不足を外から補う前の肌状態に戻る

↓

④ また外から補う

↓

⑤ 「補充 → 消失 → 再補充」を繰り返す

↓

⑥ 外から与え続けることで、一時的に整った状態をつくり続け、それを繰り返し維持する

そして、この一連をさらに一言に凝縮すると、

従来型スキンケアの発想は、

「外から補うことで、一時的に整った状態をつくり、それを繰り返し維持する発想」

です。

ここまで来ると、次に対比させるべきなのは、

「では、外から補い続けるのではなく、肌自身が自活できる状態を目指す発想」

になります。ここからが、BIFC の話に繋がります。

ポイントは、「肌を外から直接整える」のではなく、「肌が自活できる環境を整える」という発想への転換です。

整理すると、

従来型スキンケア

外から不足を補う



一時的に整う



時間とともに失われる



また補う



「補充 → 消失 → 再補充」の反復



外から与え続けることで状態を維持



発想の転換

「外から補い続ける」のではなく、

肌自身が自ら整え、維持できる状態を目指す



では、肌が自活するためには何が必要か？



肌そのものに何かを「足す」のではなく、

肌と外界との境界である“生体界面環境”を整える



生体界面環境を整えるスキンケア

という流れです。

つまり、この考え方では、

スキンケア＝肌に不足したものを与えること

から、

スキンケア＝肌が自活しやすい生体界面環境を整えること

へと定義を変えることができます。

そして、この場合の「生体界面環境」は、単なる「肌表面」ではなく、肌と外界が接する場を、肌自身が本来の働きを発揮しやすい環境として捉える、という位置づけになります。

この一本のストーリーなら、

「補う」→「整える」→「自活する」

という3段階が非常にきれいにつながります。

なぜ、唇の荒れに、リップスティックではなく、BIFC かが分かります。

ポイントは、「唇の荒れをどう見ているか」が違うからです。

従来の発想では、

唇が荒れる

- 足りないものを外から補う
- リップスティックなどで保護・保湿する
- 一時的に整う
- 時間とともにその効果が失われる
- また塗る

という「補充 → 消失 → 再補充」になりやすい。

一方、BIFC の発想は、

唇が荒れている

↓

単純に「足りないもの」を補うのではなく、
唇自身が本来の状態を保ち、自活しやすい生体界面環境を整える

↓

「外から補い続ける」から「自ら整えられる環境をつくる」へ

ということです。

だから、

なぜ、リップスティックではなく BIFC なのか？

に対する答えは、単に「BIFC のほうが保湿力が高い」ではなく、

そもそも唇の荒れに対するアプローチの思想が違うから。

というところまで持っていける。

つまり、

リップスティック

= 荒れた唇に「外から補う」

BIFC

= 唇が「自ら整え、維持しやすい生体界面環境を整える」

という対比です。

ここまで来ると、BIFC を単なる「新しいリップケア商品」ではなく、「スキンケアそのものの発想を変えるもの」として位置づけられます。

つまり、従来型スキンケアを一言で捉えるなら、

「不足を外から補うことで、一時的に整った状態をつくり、それを繰り返し維持する発想」

となります。

そして、ここで重要なのは、「一時的に良くする」ではなく「一時的に整える」という表現です。

「良くする」だと、肌そのものが改善・変化した印象が強くなります。

一方「整える」なら、

外から補うことで、その瞬間の肌状態を整える

というニュートラルな意味にできます。

そのため、最後の

「一時的な対処」

という位置づけも成立します。

ただし、コンセプトとして言語化するなら、私はさらに一段整理して、

従来型: 外から補って、状態を整える

↓

一時的に整った状態

↓

失われる

↓

また補う

↓

「補充 → 消失 → 再補充」の反復

という「構造」を見せるのが、一番わかりやすいと思います。